

家庭から幼稚園へ 暮らしをつなげる
～かくれんぼをして遊び出す子どもたちの姿から～

◆企画：灰谷知子（附属幼稚園）

実践：灰谷知子・田村郁・黒瀬愛佳（附属幼稚園）

◆はじめに

3歳児は親子共に初めての幼稚園生活であり、入園当初は不安や戸惑いも大きい。一人ひとりの思いを受けとめ、ありのままに思いを表してよいと感じられるようにし、一緒に暮らす友達や教師との関わりが嬉しいものとなっていくようにと願い、教師は支えている。

本稿では、幼稚園の暮らしに慣れてきた2学期、保護者との別れから自ら遊び出すことへ移行していく時間を3歳の子どもたちがどのように紡いでいったかを振り返り、コンピテンシーの観点から考察する。

◆事例

3歳児は、保護者と一緒に保育室までやってくる。入園間もない頃は、身支度（トイレや手洗い、所持品を自分の場所に置くことなど）を保護者と一緒にやってみることから始め、見守ってもらう中、徐々に自分で進めるようになっていった。その後、自分のやりたい遊びを見つけて遊び出していくのだが、入園当初、保護者と別れることの不安が大きい時には、教師が抱きとめたり手をつないだりして子どもの気持ちを受けとめ、一人ひとりが自ら遊び始めるまでの時間を丁寧に支えることを繰り返してきた。

事例で紹介するA児とB児は、1学期には保護者と離れがたいことも多かったが、園庭で虫を探すことが楽しくなり、「今日も虫を探しに行こう」という教師の誘いかけで遊びに気持ちが向いていくようになった経緯がある。園で捕まえた虫をかごに入れて持ち帰り、その虫かごを再び家庭から持ってきて遊びに使うことを繰り返す中で、『虫かご』というモノが園と家庭とをつなげていったことも、安心して遊び出すきっかけになっていった。

また、A児、B児が不安を抱えながらも遊び始めようとするタイミングで、教師は保護者に「行ってらっしゃい」と声をかけ見送るようにしてきた。「行ってらっしゃい」の言葉には、幼稚園で保護者のことを待っているという子どもの側からの思いを代弁したいという願いと共に、「行ってらっしゃい」の裏には必ず「おかえりなさい」があること、つまり保護者が必ず戻ってくるということを子ども達が感じられるようにという願いもあった。

このような1学期の日々を重ね、少しずつ幼稚園が自分たちの場所であると感じ、遊び出していった2学期の事例を紹介する。

隠れる子どもたち

3歳児9月

この日のA児は、少し涙を浮かべながら保護者と身支度を進めていて、周りの子どもたちも心配そうに様子を見ていた。その後、玄関までお母さんを見に行きたい（見送る）と教師に伝えてきた。教師も一緒に行くことにすると、A児の様子を見ていた数名の子どもたちも、一緒に行きたいとついていくことになった。教師がソファを玄関の窓の近くに寄せ園外に出ていく保護者の姿が見えるようにすると、その上に子どもたちがぴったりと身を寄せ合い並んで座る。園外に出たA児の保護者と窓の網戸越しに

タッチしながら、子どもたちは口々に「いってらっしゃい」と声をかけた。

保護者の姿が見えなくなる頃、ふと B 児がソファを降りて、近くの移動式ホワイトボードの後ろに身を隠した。B 児の様子に気づいた教師が「B ちゃんがないなあ」と探し始めると、他の子どもも真似をして同じ場所に身を寄せた。「みつけた」と教師が声をかけると、再び子どもたちは玄関の机の下に移動し、かくれんぼのようなことが始まっていった。A 児も一緒になって身体を小さくする。「○ちゃん、みつけた」と教師が一人ひとりの名前を呼ぶと、子どもたちは笑い合った。「じゃあ、今度はお庭に隠れちゃおうか」と教師が誘うと、保育室に皆で駆け出していった。

【考察】

2 学期、登園時の戸惑いは減ってきたものの、その日の体調や気持ちのリズムによっては、保護者と別れがたい時もある。涙を浮かべる A 児の近くに集まってきた子ども達からは、『大丈夫?』と心配する気持ちと共に、自分自身もほんの少し心が揺れているような様子も伝わってきた。

そして、自ら玄関まで保護者を見送りにいくことを A 児は選んだ。A 児の覚悟のようなものを感じ、教師も一緒に見届けたいと思ったが、周りにいた子どもたちも同じような気持ちだったのだろう。A 児と子どもたちと皆で一緒に保護者との別れの時間を共有できるように、教師は横並びに座れるようにソファを配置した。ぴたりと身体をくっつけながら保護者にタッチをして「いってらっしゃい」と声をかける姿からは、『必ずまた幼稚園に迎えにきてくれる』という前向きな気持ちも伝わってきた。

保護者の姿が見えなくなった時、B 児が自分の身体を隠した。見えなくなるまで友達や教師と一緒に保護者を見送った時間と、すでに遊び始めている年長児の楽しい声が響く空間などから、思わず身体が動き出したのかもしれない。B 児が隠れる行為の裏には、当然『必ず自分のことを見つけてくれる』という期待があり、教師は B 児の思いを感じ取って探し始めた。「みつけた」と声をかけると再び隠れることを繰り返しながら、保護者との別れの時間から、幼稚園で自らのやりたいことを見つけて遊び出す時間を、子どもたちがつなげていったのだと考える。

◆おわりに コンピテンシー育成の観点より

幼稚園の朝の時間は、保護者との別れつまり家庭から幼稚園への緩やかな移行の時間である。入園当初は、移行の時間の一人ひとりの子どもの思いを教師が受けとめながら、子どもが自分で好きなものや場所を見つけて動き出せるようにと支えることを大事にしてきた。教師を支えに自分の好きなことを見つけ、楽しかったという思いを抱えて再び家庭に帰ることを繰り返しながら、子どもたちは幼稚園も自分が安心して過ごせる場所という実感を得ていった。

事例では、不安を抱える A 児が自ら見送りにいくことを決め、A 児の思いに触れた子どもたちも一緒にその時間に寄り添った。保護者の姿が見えなくなったという出来事を受けて自分の身体を『見えなくする(隠れる)』という遊びに転換していった B 児。そして、隠れる B 児と探し出す教師とのやりとりを感じ取って、同じように『隠れる』子どもたち。この姿からは、別れの時間を友達や教師と一緒に味わい、そして自らの遊びにつなげて動き出すことで、3 歳児なりに自分たちで家庭から幼稚園への移行の時間を乗り越えていこうとする力が読み取れる。子どもたち自らが、幼稚園を自分の場所として、やりたい遊びに向かっていく姿は、主体性を発揮する暮らしそのものである。これは「自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する力」である「エージェンシー」の基盤になると考える。